

小野神社・矢彦神社の社殿と御柱

1 はじめに

塩尻市の善知鳥峠南側の国道153号線沿いに同市と上伊那郡辰野町に跨って盆地状の小野地区があります。北部の塩尻市側（北小野）に小野神社と矢彦神社（境内は辰野町の飛地）が隣接して祭られています。両社は信濃国二之宮とされる高い格式を有し、諏訪大社（信濃国一之宮）の御柱祭の翌年に、「人を見るなら諏訪の御柱、綺羅を見るなら小野の御柱」と言われる程のあでやかな御柱祭を行っており、本年がその年でした。歴史も古いのですが、何回も建替えや修復が行われています。ここでは、両社の社殿の一部や御柱について簡単に調査した結果を紹介します。

2 社殿について

小野神社は寛文12年（1672年）に焼失後、同年、松本藩により再建された本殿2社、八幡宮本殿、勅使殿等が現存しており、県宝に指定されていますが、立入り禁止となっています。

そこで、これらの前方にある拝殿（写真1）について紹介します。現拝殿は歴史が新しく、大正4年（1915年）の再建で、築90年です。柱、梁、土台、壁・床板等、殆ど全てがケヤキで造られており、彫刻等の装飾も特に無いスッキリした造りです。まだ健全な状態を保っていますが、耐朽性



写真1 小野神社拝殿

の高いケヤキであっても、写真2のように雨水の当り易い欄干の角の一部に腐朽が見られました。

次に矢彦神社ですが、社殿は前の方から神楽殿、勅使殿、拝殿及び回廊、本殿の順に並んでおり、

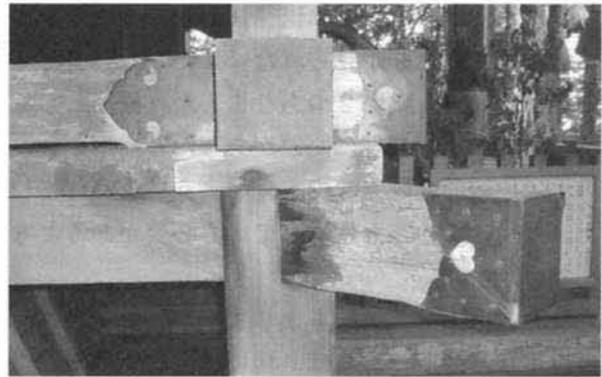


写真2 ケヤキ材の腐朽



写真3 矢彦神社 神楽殿 (左は二の柱)

何れも県宝に指定されています。

神楽殿（写真3）は天保13年（1842年）の建立で築163年ですが、この場合は数種類の樹種が使われており、柱はケヤキ、外縁の東石上の東はクリ、階段もクリ、横架材の多くはアカマツが使われています。その中で回廊下のアカマツの大引きには虫害（シバンムシか？）が見られ、その部分は腐朽も進行していました。板材としては回廊（縁側）の床板はクリで、部分的にヒノキの板で修復されています。屋根裏の野地板はアカマツが使われています。

勅使殿は小さな建築物ですが、全てケヤキで造られています。

最後に拝殿とそれに付随する回廊（写真4）ですが、これは神楽殿より古く、天明2年（1782年）の建立で築223年になります。立川流の楚を築いた名工である立川和四郎富棟の作で、見事な彫刻（写真5）で飾られています。材料は殆どケ



写真4 矢彦神社 拝殿と回廊



写真5 矢彦神社 拝殿の彫刻

ヤキです。前述の神楽殿はその長男の立川和四郎富昌の作で、ここにも彫刻が施されています。

この奥の本殿には入れません。

3 御柱について

小野神社と矢彦神社の御柱では大きな違いがあります。一つは樹種の違いで、小野神社はアカマツ、矢彦神社はモミ（ウラジロモミかも知れませんが、神様の前では植物分類学上の区分などはどうでも良いのです）が使われています。

また、樹種の違いとともに大きな違いは剥皮の有無です。アカマツは皮付きのまま、モミは樹皮が剥かれています。

その他では、大きさが違う点です。両社の一の柱から四の柱まで8本全ての御柱の地表面から高さ60~80cm 付近の周囲長を、かなり大まかな測り方ですが測定してみました。矢彦神社のモミは一の柱の周囲長が250cm 程度ですので断面が正円とすれば直径は80cm 程度です。一番細い四の柱でも周囲長が200cm を超えています。小野神社のアカマツでは一の柱の周囲長が200cm 弱（断面が正円とすれば直径64cm 程度）で、四の柱の周囲長は168cm（同様に直径53cm 程度）でした。



写真6 小野神社 一の柱

この柱が右側、二の柱が左側で、三の柱がその後方の社殿裏隅、四の柱も一の柱の後方の社殿裏隅に建てられています。径は太い順に一〜四が原則ですが、大きさだけでなく、通直で節が少なく、断面形状が正円に



写真7 矢彦神社 四の柱

に近いものが、目立ち易い社殿前面の一と二の柱に使われているように見受けられました。実際に、太さだけでは両社とも三の柱の方が若干太いのですが、形状が劣るため裏面にされたのではないかと思います。

4 おわりに

ここで紹介したように、小野神社・矢彦神社は隣接していますが、社殿や御柱の違いなどを見比べることができ、興味深いものがあります。また、巨木が林立する社叢林（県の天然記念物）もすばらしく、一見の価値があります。機会があればお訪ねください。その際は、裏側にひっそりと建つ不遇の三の柱、四の柱へもお参りしたらどうでしょうか。また違った感覚が得られます。

（木材部 伊東嘉文）